

古の約束

書架の山に埋もれる者 —雪華—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

愛と言う名のお呪い。禁忌の恋。遙か昔に交わした、古の約束。

目次

古の約束

1

古の約束

空より、星が降った日。

幾数本の流星たちが、漆黒のキャンパスに赫い線を描く。

幻想のような光景。

誰もが目を奪われた。

心を奪われ立ち尽くした。

そして、いのちを奪われた。

それは永く、一瞬の出来事だった。

栄華を極めていたはずの、大陸でも指折りの緑豊かな大都市。

次の朝日を拝む頃には、その地に色は無かった。



ざくり、と。

干からびた老骨の楔が、砂の雪原に足跡を刻む。

照りつける灼熱の太陽。皮袋の中の飲水はとうに無く、キリキリと痛む喉は、迅速な

休養を訴えかけていた。

遙か天空で、ガブラスの群れが鳴いている。

老骨が背負う、錆びてなお覇気を放つ刃を恐れてか、牙を持つ天使はその瞳を老骨に向けるのみ。

頭上に死神の鎌を携えながらも、老骨は、楔を打ち続けた。

今にも折れそうな老骨に鞭打ち、楔を打つ由は唯ひとつ。

全ては、故郷に残した想い人に逢う為に。

待っている、言ってくれた。

信じていると、言ってくれた。

愛していると、言ってくれた。

もう一度この手を握り、名を呼んで貰うために。

もう一度あの小さな背を抱き、名を呼ぶために。

もう一度。

もう一度。

もう、一度。

その為に還るのだ。

故郷へ。貴女の元へ。

たとえば、この身が朽ち果てようとも。



どれ程、楔を打ち続けただろう。

一向に故郷は見えない。

—まさか。

老骨に一抹の懸念が過ぎる。気づけば踵を返し、走り出していた。

そして、辿り着く。

砂に埋もれながらも、道を示すようにその頭角を出す、地下へと続く路を。

躯体が、脳が、魂が震えた。

そして聞いた。



老骨の名を呼ぶ、想い人の声を。



「ーッ」
転げるように路を下った。

心臓が早鐘のように鳴っている。

ああ。アア。嗚呼。

—そこに、いるのか。



「ッ！」



この建物には見覚えがある。

ここも。ここも。

通りで、いくら捜し求めても見つからなかったわけだ。

何もかも、砂に埋まり覆い隠されていたのだから。

とうに限界を迎えた楔を引き摺りながら、老骨は記憶の地図を頼りに進む。

「■■■■」

その角を左に曲がれば。

辿り着く。かつての住処に。

「■■■■」

「□□□□」

また、聞こえた。間違いない。

「■■■■ツ！」

——いるんだな。そこに。

朽ちた扉を楔で穿つと、老骨は奥へと進む。

そして、見た。

壁面に遺された、想い人からの手記を。

「■■■■……」

—— 赫い星が降り注ぎ、一族はこの地を離れた。私も故郷を離れるが、いつか再び貴方に、■■■■に逢えると信じているから——

涙が、溢れた。

「■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■」

何度も彼女の名前を呼ぶ。

何度も何度も。

何度も。

喉が灼けても。

血を吐こうとも。

声が、掻き切れても。

「■■■■ ツ!!!」

老骨の魂の咆哮は風となつて、廃墟を抜けて虚空へ散つた。

◆◆

老骨は再び長い^対旅路へと歩を進め始め^廻めた。

愛する^我ものと己の運命がまだ^狂あると信じて^繼。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
…
…
…?
?

決して歩みを止めないことを誓いながら。
もう一度、君に逢うために。
樂^た土^{つち}が^が辻^{つじ}の^の淵^{ふち}と^と成^なら^らん^ん。